

オスティアおよびポルトゥス出土のキリスト教的カット・ガラス碗断片：  
海外の最新研究動向

藤井慈子（ふじい・やすこ）

1) オスティアおよびポルトゥス出土のキリスト教的カット・ガラス碗断片 3点

①オスティアのプロティロの邸宅 *Domus del Protiro* (V, II, 4-5) の下水管より出土

→*Maria Floriani Squarciappino* による報告 [文献 1]

「勝利のキリスト像」と解釈

現在オスティア考古学公園の下で他の出土ガラスと共に保管

②ポルトゥスの「パンマキウスの巡礼宿」（現ポルトゥスのバシリカ）出土の 2点

→1865年、トルロニア家による美術品収集目的の発掘。トルロニア家がその後教皇ピウス IX 世に寄贈し、現在ヴァチカン博物館にて所蔵

→*Maria Floriani Squarciappino* による報告 [文献 2]

→*Fritz Fremersdorf* による報告 [文献 3]

「律法の授与図 *Traditio Legis*」（2点共）と解釈

\**Squarciappino* は、これら 3点すべて同じ工房製である可能性を指摘したが、オスティアやポルトゥスなどの地元製ではなく、これらのカット・ガラスは、ポルトゥス建設前にイタリア半島のティレニア海側の「東方の窓口」であったプテオリ（現ポッツォーリ）にあった可能性を説いている。

\**Squarciappino* や *Fremersdorf* の描き起こし図は、淡緑透明のガラス碗の内側から描いたものと、外側描いたものが混在して統一されていない

2) 古代末期のカット・ガラスに関する近年の代表的研究者の見解

*Lucia Saguí* : 1977年以降、オスティアおよびポルトゥスならびにローマ（クリプタ・バルビ、パラティーノの北東斜面）の発掘で出土した多数のカット・ガラス断片を調査・再整理し、それらの実測図を作成。工房特定には慎重な姿勢をとるが、ローマから多く出土する2つのタイプのカット・ガラスについては、ローマ工房製とみなす。[文献 4,5]

*Fabrizio Paolucci*: 1997年に著書『イタリア北部およびラエティア出土の帝政中期～後期カット・ガラス』で、当該地におけるカット・ガラス製造や用途、意義、工房や図像について論じ、続く2002年に『4世紀のローマにおけるカット・ガラス美術』を上梓し、カット技法やg主題に基づき5つのグループ/工房を特定。[文献 6-7]

*Stefanie Nagel*: 2020年に、これまで報告されてきた帝国全土の古代末期のカット・ガラスを総括した2巻本『古代末期の具象的カット装飾ガラス』を出版。第一巻のテキストでは、カットが施されるガラスの器形を分類し、カット装飾技法を科学的に分析し、それらのカット技法の特徴に基づき5つのグループ/工房を特定、グループ別の出土分布図を発表。第二巻目のカタログでは、第一巻目で分類したグループごとではなく、主題別にみた分類で各事例の詳細をカタログ化。[文献 8]

→オスティアおよびポルトゥス出土の3点について、**Squarciappino**と同じく上記の3人も同一工房とする見解で一致。**Saguí**は、碗の内側から鑑賞者がカット装飾を見る際に、塑像的な印象を与えるよう、碗の外側に広く深い面の陰刻がされていること、顔の表現や、襷の多い衣服、手足の描き方（カット方法）に共通点がみられるとし、**Paolucci**は、これらを「マエストロ・ダニエル」グループに、**Nagel**は「彫刻的な人物像のグループA」に分類している。

→なお、同工房は、キリスト教的主題だけを扱ったのではなく、皇帝美術的、世俗的、見世物的、異教的な主題と幅広くみられる

→オスティアおよびポルトゥスならびにローマで出土したカット・ガラスの調査・収集を行った**Saguí**は、この工房がローマにあったとみなしている。その根拠は、同様なカット技法の特徴を有する断片が、ローマから多量に出土していること、また（5）でみる近年の発掘調査で確認されたガラスの窯址（二次工房の小規模なもの）やガラス製造の痕跡を物語る遺物の発見である。

### 3) **Saguí**の新たな実測図を基にした図像の再検討

①プロティロの邸宅出土碗：**Squarciappino**は「勝利のキリスト像」

**Paolucci**は「聖ラウレンティウス像」

→ラヴェンナの5世紀頃の壁面モザイクや4～5世紀の金箔ガラスの図像との比較検討

→これまで「パンの籠」と解釈されてきたものは「巻物の入れ物 **Capsa**」では？

→これまで描き分けがなされてこなかった聖人像（銘文で名前表示がない場合、特定が難しい）からの脱却？特定の聖人を示す描き分けと持ち物の登場？

→ローマを代表する殉教聖人であり教会関係者？プロティロの邸宅近くのラウレンティウス門の外には、巡礼宿 **xenodochium** を備えた聖ラウレンティウスに捧げられた教会？ [文献 9]

②ポルトゥスのバシリカ出土の二断片：**Squarciappino**は「律法の授与図」、

他の研究者たちの見解も一致

→「律法の授与図」は4世紀後半頃に誕生した新たな図像、中央の一段高い場所にキリストが立ち、向かって右下のペトロへ左手で巻物を渡し、向かって左下のパウロを祝福するかのよう右手を上げ、ペテロはパリウムで覆った手で巻物を恭しく受け取り、パウロがそれを称揚するという三角形の構図が基本。皇帝美術の影響を受けた図像ともいわれ、建物装飾（壁画、壁面モザイク）、埋葬関係（石棺）、ガラスを含む工芸品に描かれる。最初期の4世紀後半の建物装飾はローマにみられ、石棺もローマ工房があることから、ローマで誕生した図像とも考えられる。 [文献 10-11]

### 4) フランス、スペイン、ドイツ出土の類例 3点

①**Narbonne** 出土の断片（十字架を担う人物像の断片） [文献 12]

②**Almoina** 出土の断片（「律法の授与図」付き断片） [文献 13]

③**Obenburg** 出土の断片（「律法の授与図」とそれぞれの名前を示した銘文付き断片） [文献 14]

→帝国東方よりも西方や北方とのつながり？

5) オスティアおよびポルトゥスで使用されたガラス製品およびガラス製造  
Lucia Saguí と Barbara Lepri によって、オスティアおよびポルトゥスのガラス製品およびガラス製造について、初めて総括的な研究が発表。[参考文献 5, 15]

→紀元前 1 世紀から紀元後 6 世紀にかけて使用されたガラス器：器形と年代の表 3 枚

→1997~2000 年の Augusburg 大学による通称市場区画(IV. V,2)の再調査によって、5 世紀頃の二次工場の窯址とガラスの原料塊や成型途中で生じる屑ガラスなどの発見（ローマのクルプタ・バルビで出土した同時代の窯址に類似）＝オスティアに二次工場があった証拠

→オスティア考古学公園に保管されていた Caseggiato del Larario( I. ix, 3)の中庭出土の 3 kgはあるガラスの原料塊を Saguí が確認

→オスティアの第三地区の倉庫 Horrea (III. II, 6)で、ガラスの原料塊や成型途中で生じる屑やテストピース、製品などが発見（＝二次工場の示唆）

→オスティアの Caseggiato delle taberna finestate (IV. V,18) で、溶けたガラスの原料などが発見（＝二次工場の示唆）

→ポルトゥスの皇帝宮殿区域から、2 世紀後半から 3 世紀頃の二次工場の窯址と成型途中で生じる屑ガラスなどの発見＝ポルトゥスでのガラス製造の証拠

本日のまとめ

オスティアおよびポルトゥス出土のキリスト教的カット・ガラス碗断片 3 点は、近年の発掘成果やカット・ガラス研究の進展によって、4 世紀後半から 5 世紀初頭にかけて活動したローマの同一工場の作品であることが明らかにされている。また、4 世紀後半にローマで誕生したと思われる「律法の授与図」や、ローマの代表的殉教者の一人であるラウレンティウスなどは、ローマとのつながりを図像的にも裏付けている。その工房のカットは、碗を手にした人が口をつけると、キリストや二大使徒、あるいはローマを代表する殉教聖人ラウレンティウスが立体的に浮き上がるような、幾重にも重なる衣服の襞が美しい彫像的效果を狙った陰刻がほどこされていた。また、それらの聖人像に加えて、キリストを称えるキーロー・モノグラムが、時には複数画面にちりばめられ、さらには長い十字架の頂点に掲げられて聖人らに担われた。フランスやスペイン、ドイツでそれぞれ 1 点ずつ発見された同工房製の浅碗は、オスティアと帝国西方や北方との交易を物語っている。

## 参考文献

- 01) M. Floriani Squarciapino, Coppa cristiana da Ostia, *BdA* 37 (1952), pp. 204-210.
- 02) M. Floriani Squarciapino, Vetri incisi portuensi del Museo Sacro del Vaticano, *RPAA* 27 (1952/1953-1953/1954), pp. 255-269.
- 03) F. Fremersdorf, *Antikes, Islamisches und Mittelalterliches Glas sowie kleinere Arbeiten aus Stein, Gagat und verwandten Stoffen in den Vatikanischen Sammlungen Roms*, Città del Vaticano, 1975.
- 04) L. Saguì, Un piatto di vetro inciso da Roma: contributo ad un inquadramento delle officine vetrarie tardoantiche, in M.G. Picozzi, F. Carinci (ed.), *Studi in memoria di Lucia Guerrini*, Roma, 1996, pp. 337-358.
- 05) B. Lepri et L. Saguì, Vetri e indicatori di produzione vetraria a Ostia e a Porto, *MEFRA* 130-2 (2018), pp. 399-409.  
<https://doi.org/10.4000/mefra.6506>
- 06) F. Paolucci, *I vetri incisi dall'Italia settentrionale e dalla Rezia nel periodo medio e tardo imperiale*, Firenze, 1997.
- 07) F. Paolucci, *L'arte del vetro inciso a Roma nel IV secolo d. C.*, Firenze, 2002.
- 08) S. Nagel, *Die figürlich gravierten Gläser der Spätantike. Archäometrische und archäologische Untersuchungen*, 2 Bde, Regensburg, 2020.
- 09) D. Boin, *Ostia in Late Antiquity*, Oxford, 2013.
- 10) L. Spera, Traditio Legis et Clavium, in F. Bisconti(ed.), *Temi di iconografia paleocristiana*, Città del Vaticano, 2000, pp. 288-293.
- 11) R. Couezin, *The Traditio Legis: Anatomy of an Image*, Oxford, 2015.
- 12) F. Danièle et M-D. Nenna, *Tout Feu Tout Sable: Mille Ans de Verre Antique dans le Midi de la France*. Musée de Marseille, 2001.
- 13) B. Goerich, El primer cristianismo en la ciudad. La figura de San Vicente Mártir, in J. Hermosilla Pla, *La ciudad de Valencia. Historia, geografía y arte en la ciudad de Valencia II*; Valencia, 2009, pp. 276-277.
- 14) J. G. Deckers, Die römische Schale aus Obernburg, *Frankenland* 80 (1994), pp. 6–11.
- 15) B. Lepri, *Il vetro tra II e III secolo d. C.: produzione e distribuzione in area romano-ostiense*, Roma, 2021.

*BdA*=*Bollettino d'Arte*

*MEFRA*=*Mélanges de l'École française de Rome - Antiquité*

*RPAA*=*Atti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia. Rendiconti*